

胡適の国語教育改革論に関する一考察

— 近代中国における白話文・国語運動に焦点をあてて —

鄭 谷心

0. はじめに

本稿は、近代中国における白話文・国語運動に焦点をあてて、文学史家・思想家である胡適（1891-1962）の国語教育改革論を明らかにするものである。近代に至るまで、中国では口語は文章語としての地位を認められておらず、口語で書かれた小説は文語で書かれた詩文より一段低いものという偏見が強かった。しかしながら、1917年、当時アメリカのコロンビア大学に留学中の胡は、雑誌『新青年』に「文学改良芻議」を寄稿し、難解な文語文を捨てて生きた白話（口語）文学を推進することを提唱した。この提唱によって、白話文運動の口火が切られた。後に雑誌『新青年』を創刊した陳独秀とともに、胡は白話文運動を「文学改良」から「文学革命」にまで前進させた。更に白話文・国語運動に携わる過程において、胡は国語の教育目的をはじめ、教育内容・教材、および教授法のあらゆる方面について構想していった。1946年には北京大学学長となった。中共政権が成立するとアメリカに亡命し、1958年に台湾で中央研究院院長に就任し、1962年に72歳で死去した。特に白話文・国語運動の発端及びその展開において、胡の功績は甚大であったと評価されている¹。

しかしながら、マルクス主義を信奉している中共政権下において、1950年代以降、胡適思想は売国ブルジョワジーの思想として糾弾され、歴史の表舞台から消えていった。再び読まれ始めたのは70年代末の中国政府による経済改革開放以降である。特に、2000年以来、中国の資本主義化が加速し、知識人の中で中共政権による思想統制への批判が強まるなかで、胡の自由主義・民主主義思想とともに、その教育思想も次第に再評価を受けるようになっていく。たとえば、胡の文学・言語思想の形成、および哲学史における位置づけなど史的な視角から研究するものもあれば²、彼の言論自由思想と人権について新聞・社会学の視点から考察するものもある³。また、「健全なる個人主義」「民主と科学」というような現代的観点から胡の白話文運動における理論を検討する先行研究もある⁴。つまり、胡適思想のもつ現代性と民主性が現代中国社会における思想状況と人々の価値観に合致しており、さらに30年近くの研究の空白を埋めるかのように胡の研究と再評価が中国において急速に展開している。ただし、その中において、教育学の視点から胡の国語教育改革論についての研究はまだ不十分なものであるといえよう。

日本における胡に関する研究は、哲学史と文学史の分野においてなされている。たとえば、山口栄は、1950年代半ばの胡適思想批判運動におけるデューイと胡の関係から、胡の教育思想におけるプラグマティズムの影響を明らかにしている⁵。また、大原信一は、文学史的な観点か

ら胡の白話文・国語運動における数々の主張と論文を紹介している⁶。とりわけ、大原は、胡の白話文提唱が、たんに文学革命を引きおこしただけにとどまらず、近代中国における戊戌維新⁷につぐ、かつそれより深刻な思想解放運動をもたらしたと評価している⁸。しかしながら、大原の研究では、先行研究の整理がなされておらず、また胡の中学校における国語教育構想など教育方法論からの検討が行われていなかったため、胡が目指した文学と国語教育とはどのような関係にあるのか、胡が用いた改革の方法論とは何か、それが実践上においてどのような意義をもたらしたのかについては明らかにされていない。ゆえに当時の胡の国語教育改革の理論だけではなく、彼が国語教育改革の手順と実践についてどのような考えをもち、どのような教授法を提唱したのか、理論と批判を踏まえながら検討する必要があると筆者は考える。

そこで本稿の1. では、白話文・国語運動の勃発とその展開に即して、教育方法論の観点から胡の国語教育改革論の中身と意義を明らかにしたい。そのために、当時中国の国語教育が直面した独自の問題、いわゆる形式と内容、国語と文学、白話文と漢文などの二元論の問題に着目する。これらの問題に何らかの形で関わった胡の主張と理論を取り上げて検討する。胡に対する批判とその背景からはじめ、形式と内容・国語と文学に関する理論から、彼の文学・国語改革における目標と方法を検討する。2. では、国語教科書の作成と胡の中学校国語教育構想を検討することで、彼が目指した文学・国語改革の目標と方法が中学校カリキュラムにおいてどのように具現化されたのかを明らかにする。特に胡の中学校国語教育の構想とそれに対する梁啓超の批判を検討することで、両者の相違点を明らかにするとともに、胡の国語教育の目標を浮き彫りにしたい。なお、本論は、白話文・国語運動の理論の発信源となった『新青年』における論文や通信欄の内容を中心に取り上げて検討する。

1. 胡適の白話文・国語に関する理論

(1) 胡適に対する批判とその背景

1950年代、中国では、デューイのプラグマティズムの思想を一掃し、マルクス主義のイデオロギーとしての正統性を樹立する運動が展開されていた。1954年から、デューイの教え子である胡に対して、1、2年の間に数百万字の批判文章が発表された⁹。それは哲学、文学、歴史学、政治、教育など様々な分野にわたっていた。

当時、アメリカに亡命している胡はこれらの批判論文を集めて目を通した結果、「反論する必要はない」と判断した¹⁰。なぜなら、当時の批判のほとんどは米ソの冷戦構造を反映したイデオロギー批判に直結していたためである。たとえば、羅根澤は、「あの頃、私たちは新しい文学にはどのような内容があるべきかを、言いようもなかった」（『新文学大系建設理論集』）という胡の断片的な言葉を取って、胡は形式主義の代表であると批判している¹¹。加えて、羅は「胡が自ら外国帝国主義文化・文学を宣伝し」、「その最大の目的はマルクス・レーニン主義の普及を阻止すること」¹²であると胡の白話文・国語理論をイデオロギー批判問題に直結している。

また、林淡秋は、「胡の『建設理論』の『実験』、創作の実践の『試み』は「すべて文学の形式問題を解決するためのものであり」、「形式で内容を決定する唯心論である」と説明している¹³。それに対し、「内容で形式を決定するマルクス主義の唯物論」のほうが正しいと述べている¹⁴。つまり、マルクス主義という思想と価値観を中国の主流として樹立するために、胡の文学観が

絶好の材料として利用されようとしていた。

それにしても、「マルクス主義を擁護してくれたら、北京大学の学長もなんでも昔のままにすることができる」という毛沢東の誘いに対して、胡は「信念を変えると、私でなくなる」と断り続けたのである¹⁵。

胡が固持した信念は一体どのようなものなのか、彼が目指した新しい文学と国語教育の具体像はどう描かれたのか、これらを明らかにする必要がある。また、批判にあったように、胡の国語教育改革論を「形式で内容を決定する唯心論」と論断されているが、果たしてそうなのだろうか。当時の状況・文脈をふまえつつ、改めて胡の理論を検討しなければならない。

(2) 内容と形式について

まず、白話文・国語運動の発端となった「文学改良芻議」などの雑誌論文において、胡は内容と形式の関係についてどのように考えていたのかを見てみよう。

「文学改良芻議」は、1917年1月の『新青年』に掲載された。自由と民主主義の国と考えられていたアメリカから、胡が中国に向けて発した思想解放を目指すメッセージであった。この「文学改良芻議」において、胡は自分の主張を以下の8項目にまとめている。

「一つめに、文章・言論の内容を充実しなければならない(須言之有物)、二つめに、古人をまねない、三つめに、文法を重んじなければならない、四つめに、むやみに呻吟する文を書かない(不作無病呻吟の文字)、五つめに、陳腐なきまり文句をできるだけ除く、六つめに、典故を用いない、七つめに、対句にとらわれない、八つめに、俗字・俗語を避けない」¹⁶という。

一つめにおいて、胡は、「情(情感・美感)」を文学の魂、「思(見地・知力・想像力)」を文学の価値として捉えている¹⁷。この両者を有する文学が、充実した内容をもつと述べている。二つめの古人をまねないことは、「昔の人の詩ではなく、ひたすら自分自身の詩を作るべきだ」¹⁸という主張である。つまり、文学作成において個性と自我(個我)をもつことの大切さを語っている。四つめは、当時の若者が作成した詩や文章のほとんどが悲観的であることを批判する立場から発するものである。以上の3つの項目は「精神上の革命」として胡により位置づけられている。残りの5つの項目は「形式上の革命」と胡が位置付けた¹⁹。

次に、「文学改良芻議」において、胡は始めて文言に代わって白話を作文の道具として用いることを提唱した。加えて、白話文学こそ「中国文学の正統であり、将来の文学に必要な利器である」²⁰と強調している。彼は、「今日の作文や詩は、俗語・俗字を採用すべきである。三千年前の『死んだ文字(死字)』よりも、20世紀の『生きた文字(活字)』を用いた方がいい。普及していない秦漢六朝時代のものより、誰もが知っている『水滸伝』『西遊記』の文字がよほどいい」²¹と述べている。つまり、胡は俗語・俗字という大衆文化の産物を方法・手段として、生き生きとした文学を作ることで精神上の解放を目指したのである。

さらに、1919年の「談新詩」『星期評価』(双十節記念専号)において、胡は明確に文学革命における形式の役割について説明している。「文学革命の運動は、古今東西に問わず、大概『文章の形式』から手をつけて、言語文字と文体の解放をまず要求するのである。新しい文学の言語は白話であり、新しい文学の文体は自由で、型にはまらないものである」²²という。つまり、古来の文学革命は「文章の形式」から起こすことが多いという事象を述べ、その特徴として言語が平易になり、文体が自由になることを胡によって指摘されている。

一方で、胡は形式と内容のつながりをかなり意識している。彼は、「形式と内容とは密接な関係にある。形式上で束縛されては、精神が自由に伸ばず、優れた内容も十分に表現できない」とし、解放された新しい形式で「新しい思想、新しい精神を運びたい」²³という。つまり、白話の文字と文体の自由というのは、形式上のものであると同時に、新しい思想と新しい精神のある内容のために働くものだとは捉えている。胡は言語文字と文体の改革という手段・方法を選んで、精神の解放と思想の自由という目標を実現しようとしていた。明らかに、彼は「形式主義」ないし内容と形式の二元論に反対する立場に立っているのであった。

(3) 文学と国語について

近代中国において、文学と国語が最初から関連づけて論じられるものではなかった。そもそも、中国の文学の起源は口語文学であった。それを文字として記録されたのが『詩経』という詩集であった²⁴。また、「国語」という用語は清末から使われ始めている。それは日本のコクゴに由来している²⁵。清朝の支配層が国家統一のための国語という意味をもって、日本の明治期に広まったコクゴを受け止めた。白話文運動をリードした陳独秀、胡適も最初から国語と文学を違うものとして捉えていた。『新青年』の陣営において、文学と国語の研究や改革の手続きについて、様々な議論が起こった。そのなかで、とりわけ、胡の「国語の文学、文学の国語」という主張が注目を集めた。それは、白話文・国語運動の流れを大きく変えるものであった。

まず陳独秀は、『新青年』第3巻第2号での「通信欄」では、次のように述べている。「白話文学の遂行には、3つの要件がある。最初に、比較的統一された国語を有しなければならない。次に、国語の文献・典籍を作らなければならない。また、有名人は皆国語で本を書いたり、言論を立てたりしなければならない。これらの事は、そう簡単なことではないゆえ、一挙にやってしまうことはできないのである」²⁶。つまり、陳独秀は「国語の統一（標準語での統一）」と「白話文学」の関係について考え始めたが、教材づくりと教授法など実践レベルの改革を視野に入れてはなかった。つまり、「国語研究」を通して「統一した国語」の標準を作り、それをもとに「国語の文献・典籍」を編纂し、最終的に白話を文章作成の実践に取り入れようという改革の流れを考えていたのである。これは、当時、多数の学者の意見を代表するものであり²⁷、「国語の統一」を優先的に考える立場であった。

しかしながら、「国語の統一」を優先的に考える立場に対して、胡は異論を唱えた。それは、1918年に『新青年』第4巻第4号に掲載された胡の「建設的文学革命論」である。この論考は、1年前に掲載された『新青年』読者からの次の意見に応えるものであった。

「破壊するのは易しいが建設するのは難しい。これから、先生の前向きの建設的な面を重視していただきたい。(中略)学校の教科書はどのように編纂すればいいのか、自修のための書籍をどのように選定すればいいのか、これこそ今日研究しなければならない喫緊の課題である」²⁸。これは「陳独秀への手紙」という名義で送られた現職の教師の意見であった。

それを意識してか、胡はあえて「建設的」という言葉を用い、文章のはじめに、「これまでの『八不主義』²⁹はすべて破壊的・消極的な言い方であったが、去年帰国してから、各地の演説では、それらを全部肯定的な言い方に改めた」³⁰と述べている。

そして本文では、胡は、文学革命の唯一の宗旨が「国語的文学、文学的国語」の十字につきるといふ³¹。国語には文学がないと、命も価値もなく、成立することも発達することもできな

いと主張している³²。それを証明するために、彼は、イタリア、イギリスの事例をもって、国語の形成には、文学が大きな力を発揮したことを論じている。さらに、「中国の新しい文学に用いられた白話、将来の中国の標準国語である」と予言している³³。つまり、生きた国語（白話）を用いて生きた文字を創造していく（国語的文学）とともに、国家・民族としての本当に生き生きとした価値のある言語（文学的国語）を形成していく必要があるということである。

また、胡は、陳独秀らの「3つの要件」という考えに対して、「国語は単なる何人かの言語学者によって作られるものではなく、何冊の国語教科書や国語辞典によって作られるものでもない」と批判している³⁴。「国語教科書と国語辞典を作るのは、喫緊の課題ではあるが、決して国語を作る利器ではない。本当に効力のある国語教科書は、国語の文学であり、すなわち、国語の小説、詩や散文、および台本である」という。ここでは、彼は初めて国語教科書の具体的な構成について言及している。つまり、胡にとって、文学そのものに価値がある。ゆえに、文学を教育の中での応用することを考え、文学から構成する国語教科書が目指された。

さらに、胡は、「国語の文学、文学の国語」を実現するために、「①道具、②方法、③創造」という3つの段階を提案している。①について、「道具は白話である。国語文学を創造しようとする人は、この道具を以って準備しなければならない」という。この「道具」を準備する方法としては、「甲、モデルとなる白話文学を多く読むこと」と「乙、白話で様々な文学作品を書くこと」を紹介している。つまり、「読むこと」と「書くこと」の2つの基本的な国語教授・学習の方法論が触れられた。

②については、いわゆる「文学的方法」である。それには次の3つの種類があるという。一つめは材料を収集する方法である。さらにこの方法を「甲、材料の範囲を広めること」、「乙、実地の観察と個人の経験を重視すること」、および「丙、生き生きとした綿密な想像力（imagination）を以って観察と経験を補助すること」の3つに分けている。ここでの「想像力（imagination）は、観察と経験から材料を取り出したり、整理したり、組み立てたりする際に、重要な役割を果たすものである。すなわち、既知のことから未知のこと、経験したこと从未経験のこと、観察可能のものから観察不可能のものを推測すること」³⁵を指している。胡は、「これこそ、文学者の技量である」³⁶と語っている。二つめは、構成の方法である。そこには、「内容と材料の取捨選択を行うこと」（何を書くのか）と「材料を組み立てること」（どうやって書くのか）の2つの段階があったという³⁷。三つめは、描写の方法であり、それには、人・場景・事・感情という4つの描写の方法があるとまとめられている。加えて、中国文学の方法論はまだ不十分であり、西洋の文学方法を参考し、西洋の優秀な作品を翻訳することを推奨している。

③の創造について、①と②を使いこなしてはじめて、中国の新しい文学を創造することができるという。今は創造の方法と手段を空論せずに、まず①と②の予備の努力と工夫をしなければならずと彼は提案している。

以上、胡が考えた「道具」、「文学的方法」と「創造」は言うまでもなく、国語教育と作文教育にも通じるものである。なぜなら、胡はアメリカで留学している頃から、国語教育と作文教育について方法論の視点から考察した論文を執筆していた。たとえば、1915年に、「国語をわかりやすく教授するためにどうすればいいか」³⁸という論文において、胡は「漢文の教育の失

敗は、教授法にあった」³⁹と指摘し、特にそれまで「文法で国語を教えなかったこと」と「文章記号を使わないことで文字が普及しにくかったこと」⁴⁰を問題視している。続けて1916年に「作文するには文法を重んじないと害が生じる」⁴¹という論文において、自らの生活と伝統を重視する国語教授観を述べるとともに、国語の文法についての研究を発表した。当時、胡は、文章の内容と形式を意識していたが、文学と国語の関係には触れていなかったのである。

しかしながら、「建設的文学革命論」は、生きた白話文学を作る方法と生きた国語の形成過程を結合することを主張した。それまで主流となっていた白話文運動・文学改革の流れは、陳独秀が提唱した「国語の研究から文学の実践へ」というような教育の文脈から離れた文学改革の段階論であった。すなわち、「国語研究」を通して「統一した国語」の標準を作り、それをもとに「国語の文献・典籍」を編纂し、最終的に標準化された白話を文学に応用しようという改革の流れであった。一方、胡は教育現場の意見をふまえ、「国語的文学、文学的国語」およびそれを実現するための媒体（文学から構成される国語教科書）と方法（「①道具、②方法、③創造」）を「建設的文学革命論」において明確に示した。それにより、内容と形式、文学と国語の一元化を実現させようとする見取り図ができるようになった。その頃から、白話文運動・文学改革は理論上において、はじめて国語運動と一つの潮流に合流したといえよう。したがって、その潮流は単なる理論上のものにとどまらず、やがて政府の政策と民間の国語教育改革の実践を大きく動かすものになっていった。

2. 国語教科書の作成と国語教育の構想・論争

(1) 白話教科書の成立

1918年、「建設的文学革命論」が掲載された後、『新青年』の「通信」欄において再度論争が行われた。それは、文学改革の手続きについてであった。「大学入試から白話を導入しよう。そうすると、中等学校は自然に白話を重んじるようになる」という主張には胡は反対した⁴²。彼は、「カギは学校教育である」が、まず「低学年からやらなければならない」⁴³と主張した。なぜなら、学校教育は「価値のある国語（白話）文学を作ることで、それを信仰する国民の心理を育成しなければならないのである」⁴⁴と主張した。さらに「実行の方法として、小・中学校の教科書を一律で国語（白話）で編纂すること」を提案した⁴⁵。これは、外部的な押し付けではなく、人間本来の発達を重視し、その内なる審美的価値形成を重視する考え方であった。

この新しい提案は、直ちに国語教育界において大きな反響を起こした。1919年4月に、北洋軍閥政府の教育部の付属機関である国語統一準備委員会によって審議会が開かれた。胡適、周作人、錢玄同等の国語学者が連名で会議において「国語統一の実施方案」を提出した。そこで、「国語の統一を小学校から着手しようとするれば、小学校の各教科の教科書を国語（白話）伝播の本拠地とみなすべきこと」⁴⁶を提案し、国家レベルで白話文を小中学校の教科書へ導入する機が熟したことを宣言した。1920年1月、北洋軍閥政府の教育部は、国民学校（小学校）1、2年生の「国文」を「国語」と改称し、3年生は1921年までに改称すると命令した。また、1922年以降、すべての国民小学校教科書は、文語文の代わりに白話文の教科書を起用する旨も公布した。胡は、「この命令は、少なくとも中国における教育の革新を20年ほど早めることになるだろう」⁴⁷と高く評価している。同年、商務印書館によって、『新体国語教科書』（8冊）

が出版された。これは、中国の初めての小学校国語教科書であった。続けて、『中等学校用白話文範』（4冊）が出版され、これは中国初の中学校国語教科書となった。これは、胡の「国語的文学、文学的国語」が教育実践において実現されたことを示す象徴的な出来事であったといえよう。

1920年9月、北京大学の周作人は北京の講演において、児童の「内面と外面の両方の生活の必要を満たすように」、「文学教育によって彼らの本来の趣味と興味を引き出し、新しい趣味と興味を喚起しよう」と「児童文学」を提唱した⁴⁸。胡も周の「神話・童話・物語」を積極的に取り入れた「児童文学」を紹介し、児童文学の流行は、「国語運動の力を増大させるばかりではなく、児童の文学的趣味の育成にも大きな役割を果たしてくれるだろう」と熱く称賛している⁴⁹。つまり、児童の文学的趣味の育成は、胡が考えた低学年からの審美的価値形成の観点と合致した。また、文学教育を、児童の内なる発達への理解・関心と結びづくことによって、白話文・国語運動に新たな教育的意義を与えたのである。

(2) 中学校国語カリキュラムの構想

以上、白話教科書の登場と「児童文学」の流行は、白話文運動の成果であり、作文教育ないし国語の教材内容と教育目的の上で重大な変化がおこったことを示した。これらの成果と変化を、中等教育の段階における国語教育カリキュラムの理論として具体化したのは、胡の「中学校国語の教授」（1920年）と「中学校の国語教学についての再検討」（1922年）であった⁵⁰。これらの論文は、胡が「6・3・3」新学制のために構想した中学校国語カリキュラムの草案でもあった。1922年、「新学制系統改革案」の制定と同時に、新学制における「課程標準」（スタンダード）を作る必要があると胡が呼びかけたことで、新学制課程標準起草委員会が教育当局によって組織された。そこで、胡は委員に選挙されており、「国語課程綱要」（日本の学習指導要領に当たる）の作成にかかわっていた。ゆえに、胡が構想した草案は、1923年に公表された新学制の「国語課程綱要」の理論的な素地になったといえる。

具体的に、「中学校国語の教授」は、1. 中学校国語の目的とは何、2. 中学校国語カリキュラム（仮）、3. 国語文の教材と教授法、4. 演説と弁論、5. 漢文の教材と教授法、6. 文法と作文、7. 結論の7つの章から構成されている。

この論文の序文で、胡は自分が中学校における国語教授の経験を持たない「門外漢」であるものの、『門外漢』であってこそ、慣習にとらわれず、時には新鮮な意見、意外な参考になる材料を提供することができる」と述べた。また、胡は、「現在と将来の中学校教育者は私に実験の機会を下さい。この理想の計画を随時にテストを通して、どの部分が行けるか、どの部分が修正しなければならないかを証明して下さい」と呼びかけている。つまり、胡は白話文・国語運動の更なる展開を期待しており、これまでの理論を国語教育の実践上へ転化するよう働きかけている。

中学校国語教育の目的について、胡は下記のようなスタンダード（「標準」）を提案している。

「(1) 皆（人人）は国語（白話）で自由に思想を發表することができる。作文、演説、会話が明白で流暢であり、文法上の間違いがないこと。

(2) 皆は平易な古典書籍を読むことができること。たとえば、『二十四史』（正史）、『資治通鑑』（編年体の歴史書）である。

(3) 皆は筋の通っている漢文を書くことができること。

(4) 皆は漢文の文学を知る機会を有すること。」⁵²

(1)では、胡は「自由に思想を發表すること」の判断基準として、「明白で流暢」であることと、「文法上の間違いがないこと」を明文化している。特に、「文法を重んじなければならない」という考えは、胡は「文学改良芻議」を書いた頃から持っていた。なぜなら、中国古来の文学・哲学思想には、「自分の感性を磨くことが重視される一方で、論理的かつ具体的な方法論が持たれない」という特徴を持っていることが胡自身の研究によって明らかになっていたのである⁵³。外国文学と中国古典の両者を研究してきた胡が、「中国の文法学の発生が一番遅い」と嘆いたこともある⁵⁴。そのため、胡は、「作文を教えた人は文法を知らない」という現象を批判し、清末以来の「文法要略」という科目を「文法と作文」に変更し、「中学校の国語教員は文法学の知識を持たないと、決して教員になってはいけない」と固く主張している⁵⁵。

この考えは、スタンダード(1)とカリキュラム編成だけではなく、教授法においても反映されている。たとえば、「第一学年において、白話文法の要旨をすべて終わらせる。(中略)第2、3学年において、漢文の文法を教授し、各箇所を白話文法と比較・対照したり、生徒に批評させたりするという提案から、文法の応用と批評を重視していることが理解できよう。

(2)~(4)について、一見、漢文の読み書きがまだ重視されていることにはみえる。胡が提案したカリキュラム編成をみると、国語(白話)の授業は、3、4年になると、演説と弁論という実習科目に変更される一方で、漢文・古典の学習は中学校の四年間に習得される形になっている⁵⁶。そこには、白話文運動の宗旨に通じるような次の教育的・実験的な理由があったと考えられる。

まず、カリキュラムにおける科目構成をみると、従来の習字、文字源流、文学史、文法要略の4つの科目が胡によって削除されたことがわかる。その理由について、胡は、「字を書くのは毎週一時間の授業でうまくなれるものではない。現存する『文法要略』と『文字源流』は、文法と文字学をわからない人が編纂したもので、読んだら勉強になるどころか、害が生じるのだ。文学史は名前だけ覚えて、著作を知らないでは、なんの役にも立たない」⁵⁷と述べている。また、胡は中学校国語における白話と漢文の割合を1対3のように設計していた。その理由は、「初級小学校と高等小学校の7年間で国語(白話)の活用が十分できているという仮説を立てたの」⁵⁸であった。しかしながら、彼はすぐに白話の活用ができるようになるには7年間だけでは足りないことを認識し、1922年の『中学校の国語教学についての再検討』では、「自由に思想を發表することができる道具」である「国語(白話)文を作成できること」を「第一の基準」として設定すべきと提案した。さらに「古い文語文(漢文)を中学校国語の目的ではなく、ただ文法を実習するための道具としてみなすべき」⁵⁹であるとしている。

つまり、胡が漢文教育に対しては形式陶冶的な考え方を持っていたことを意味する。先述した漢文の教授法にも反映されているが、漢文の文字・文法そのものを習得するよりも、漢文を学ぶことによって言語の文字・文法を比較・批評する方法とスキルを身につけさせようという考え方である。そうすると、生徒は自ら白話文と漢文の比較検討を通してそれぞれの良し悪しを批評し、自ら判断し、自ら選択し、自らの意見を述べるようになるということである。これは、胡が目指した「思想を自由に發表することができること」の本当の意味であり、白話文運動の宗旨である「精神の解放と思想の自由」につながるものである。

(3) 中学校における国語教授：梁啓超による胡への批判

以上のような胡の主張に対して、様々な反論がなされていた。その中で、最も注目されるのは、梁啓超（1873-1929）の1922年7月と8月の講演『中学以上の作文教授法』であった。また、梁の手稿が2002年に新たに発見されたことによって、胡・梁論争が「80年前の中学校国語教育に関する論争」として関心を集めている⁶⁰。次に、両者の3つの論点から検討しよう。

一つめは、中学校における国語授業と作文は、白話か漢文のどれを主とするかという問題である。既述のように、胡は、最も思想を自由に発表できる白話で作文をするべきという考えをもち、漢文を教えることを、白話を活用するための補助道具として捉えている。それに対して、梁は「小学校は白話で、中学校以上は漢文を教えるべきである。作文は白話と漢文のどれでもいい」と主張している。なぜなら、「文章の良し悪しは、白話か漢文かとは関係なく」、「内容から判断し、意味が伝わるかどうかによる」ものであり、「決して主従の関係として捉えてはならない」という。これは、白話と漢文を平等な位置に並べて中身で勝負するという考えである。

また、梁は、近代白話文の中、「記述文が少なすぎて、価値のあるものが殆どない」とし、「議論文・説明文の中でよい作品が少なくないが、テーマが狭く、専門性が高すぎたため、中学生に向いていない」と判断している。これは、胡の白話文学の作品から国語教材を構成しようという提案に反対する意見である。さらに、「十年後には、白話作品を中学校の教材として使えるものが増えるが、今日はまだ機が熟していない。国内で白話を上手く書ける人は、誰もが高度な漢文の知識・技能を備えているのではないか」と結論づけている。つまり、梁は白話の文章を上手く書ける基礎・基本はやはり漢文にあると考えたのである。

続けての論点は、何を育成すべき力として中学校の教材を選択するのかという問題である。胡は「中学校国語の教授」において、教材編成の際に、「白話小説」、「白話の演劇と長編の議論文・学術論文」、「漢文の議論文」という3つの教材に重きを置くよう提案した⁶¹。既述のように、胡が「情（情感・美感）」を文学の魂、「思（見地・知力・想像力）」を文学の価値として捉えているため、文学の鑑賞力と論文を書くことができるような高次な思考力の育成を重視している。それに対して、まず文学の鑑賞力について、梁は次のように述べている。

「中学生は相当な文学の鑑賞力を備えなければならないことは、私も認める。だが、中学校の教育目的は、専門的な文学者を養成するのではなく、常識を育成することにある。そのために、国語の教材は、実用文を主要として美文を副次なものにするべきである。高校における文学専攻の人以外に、実用文が80%以上、純粋な文学作品は1、2割でいいのである」⁶²。つまり、この主張には、中等教育段階では、審美的な鑑賞力よりも、物事を客観的に捉えて特定の相手に伝えることができるような常識力を育成すべきという梁の考えが映し出されている。

また、梁は「作文を学ぶ際、記述文を中心にすべきだ」と提唱している。「幻想的・刺激的な文学」が中学生に向いていないと考えていたのである。想像力の育成に偏る小説と異なって、記述文においては、観察力が重要であるという。つまり、梁にとって、中学生の観察力を育成することが一番大切である。これは実用文を書く力につながると考えたためである。

さらに、議論文を重視するという胡の考えに対して、梁は激しく批判している。梁は、まず「議論文に偏った教授法は、文章力を容易に伸ばすことができない」という。論文を書く高次の思考力が、短期間で身につけることができないだろう。また、「教員が型にはまった論題を出

すことは、剽窃、空論、思いやりのないことと偽りのあることを奨励することと同様である」と述べている。これは、「不健全な性格を形成すること」になり、「学術上においても道德教育上でも既に様々な悪い影響を与えてきた」と警鐘を鳴らしている。当時、白話文の教育がそれほど普及していない中、梁は想定している議論文の教育は、従来型にはまった漢文の議論文の教え方であると捉えている。彼は、論文を通して高次な思考力を育てようとする胡適の方法と異なって、人格形成と道德教育の観点から論文の教え方を考えたのである。

最後の一つは、文法か文章の構成のどちらを重視するかという問題である。既述のように、胡が白話文・国語運動の展開において、文法を教えることを一貫して重視してきた。それに対して、梁は「文章は本来、自分の考えを他の人に伝えることに過ぎない。文章の一部分は構成で、一部分は修辞である。(中略)文章が良いかどうか、人を感動させるかどうかによる。修辞が決め手である。しかし、修辞の上達には天分が必要なゆえに、教員は生徒に文章を教えることができるが、良い文章を書くことを教えられない」⁶³と述べている。そこで、梁は、読む教育において、文の組み立て方に重心を置き、作者の考えの道筋を理解することが大事であると主張した。作文教育の際は「考えを整理する習慣を育成すべき」⁶⁴とした。文を修正する時も、「考えがはっきりしているかどうか、組み立てが正しいかどうかに注意し、個別の誤字・脱字と短文の間違ひは大した問題ではない」⁶⁵と述べている。つまり、梁は文章を構成するために自らの考えを分かりやすく整理することを第一に捉えていた。

以上をふまえると、両者とも漢文と白話文の文学における審美的価値を評価し、書くことを重視する点において共通しているといえる。しかし、中等教育段階においてどのような国語力を優先して生徒たちに身につけさせるべきか、という点においては根本的な違いが生じている。梁は、中等教育における基礎的・基本的国語力の育成と人格教育を重視している。彼は漢文を白話文の根源として捉えているため、中学校では漢文による記述文と実用文を教材として採用し、生徒に客観的な物事を捉える観察力、考えを整理して特定の相手に伝えることができるような書く力を育成すべきと考えた。一方で、胡は、梁が考えた基礎的・基本的な国語力を初等教育段階の白話を通して育成されるべきものと考え、中等教育段階では、漢文と白話の比較研究を通じて推論力・鑑賞力・批評力を身につけ、白話の小説・演劇などを通して新しい文学を創造するための想像力を生徒たちに身につけさせるべきと主張した。実際に、胡はアメリカで博士学位論文を書いた頃から、中国哲学における論理的な方法論の欠如を問題視してきた。この問題を克服して新しい文学を創造するためには、中等教育段階の国語教育において生徒たちに自ら文学を研究できるようになるための文法や方法論の知見を身につけさせなければならないと考えたのである。

3. おわりに

本稿では、近代中国における白話文・国語運動の発端と展開において重要な役割を果たした胡の文学改革論と国語教育論の形成過程とその方法論を、理論と批判を踏まえながら検討してきた。梁との論争を経て、胡は白話文学の開花と白話教科書の普及を成果として捉える一方で、「漢文を教える時には、かえって適切な教材がない」と認識しはじめた。そのため、西洋の「新式の方法で漢文を整理」して自修教材を生徒に提供しようと、胡は古典の整理と研究に没頭す

るようになっていった。

だが、胡の教育構想はそのまま消え去ったわけではない。彼が目指した文学と国語教育の方法論は「個人の哀歓」という狭い範囲を乗り越え、現実社会・歴史・人間の生命に対する広い関心と結びついた場合、社会を変革する可能性を秘めているだろう。この意味では、当時の主流となった胡の教育構想は、白話文学の創造と国語の統一に貢献しただけではなく、「精神の解放と思想の自由」を求める近代中国社会の知識人と教育者に実験の場を提供したのである。それは、現代中国における国語教育の理論と実践の展開にどのような影響を及ぼしているのかを検討することを、今後の課題としたい。

- 1 大原信一「胡適と白話文・国語運動」『同志社外国文学研究』1992年、pp.62-85。
- 2 欧陽哲生『中国現代哲学史上の胡適』《学术界 (Academics in China)》2006年01期。王光 and 「西洋文化影響下の胡適文学思想」中国知網、首都師範大学2009年文学博士論文。
- 3 王婧「胡適が人権概念に対する解釈——『新月』時期における胡適の自由主義観」中国知網、西南政法大学2007年修士論文。吳麟「胡適言論自由思想研究」中国知網、華中科技大学2008年博士論文。
- 4 趙海紅「胡適語文(国語)教育思想研究」中国知網、浙江師範大学2005年修士論文。徐燕杭「胡適の白話文運動における民主と科学の理念」《杭州電子科学技術大学学报(社会科学版) Journal of Hangzhou Dianzi University(Social Sciences),》2013年01期。
- 5 山口栄「胡適の教育思想—デューイと胡適—」『日本デューイ学会紀要』第39号、1998年、pp.199-201。
- 6 大原前掲論文(「胡適と白話文・国語運動」)、pp.62-85。
- 7 戊戌維新(戊戌の変法)とは、清王朝時代の中国において、1898年、光緒帝の全面的な支持の下、若い士大夫層である康有為・梁啓超・譚嗣同らの変法派によって行われた政治改革運動をいう。100日あまりで失敗に終わったことから〈百日維新〉とも呼ばれる(『世界大百科事典』2009年)。
- 8 大原前掲論文(「胡適と白話文・国語運動」)、pp.62-85。
- 9 生活・読書・新知三聯書店編『胡適思想批判：論文彙編(第1輯～第8輯)』生活・読書・新知三聯書店、1955年。李達『胡適反動思想批判』湖北人民出版社、1955年。
- 10 陳平原(胡適人文講座創立者)「浮き沈みする胡適の60年」『南方都市报』GB24、2010年5月30日。
- 11 羅根澤「胡適の文学観点と研究方法への批判」『胡適思想批判：論文彙編(第二輯)』生活・読書・新知三聯書店、1955年、p.203。
- 12 同上、p.207。
- 13 林淡秋「胡適の文学観批判」前掲書、生活・読書・新知三聯書店、1955年、pp.240。
- 14 同上、pp.240-241。
- 15 陳平原前掲記事(「浮き沈みする胡適の60年」)。
- 16 胡適「文学改良芻議」『新青年』第2巻第5号、1917年、pp.1-12。
- 17 同上、p.2。
- 18 同上。
- 19 胡適「通信(陳独秀への手紙)」『新青年』第2巻第2号、1916年、pp.1-8。
- 20 胡適前掲論文(「文学改良芻議」)、p.10。
- 21 同上。
- 22 胡適「談新詩」『星期評語』(新聞記事・双十節記念專号)1919年10月10日。
- 23 同上。
- 24 趙敏俐ほか編『中国古代文学通論』(先秦兩漢卷)遼寧人民出版社、2005年、p.5。
- 25 大原前掲論文(「胡適と白話文・国語運動」)、p.76。
- 26 陳独秀「通信(編集者の一言)」『新青年』第3巻第2号、1917年、pp.1-6。
- 27 陳元暉編『中国近代教育史資料匯編・教育行政と教育団体』上海教育出版社、2007年、p.395。
- 28 張護蘭「通信(陳独秀への手紙)」『新青年』第3巻第3号、1917年、pp.22-23。
- 29 1. 内容のないことを書かない。2. 病気でもないのにうめかない。3. 典故を用いない。4. 陳

- 腐なきまり文句を用いない。5. 対句を重んじない。6. 文法の構造に合わない文を作らない。
7. 古人を模倣しない。8. 俗字俗語を避けない。以上は、胡適の「八不主義」である(胡適「建設的文学革命論」『新青年』第4巻第4号、1918年)。
- 30 同上、p.3。
31 同上。
32 同上、p.6。
33 同上。
34 同上。
35 同上、pp.12-13。
36 同上、p.13。
37 同上、p.14。
38 胡適「国語をわかりやすく教授するためにどうすればいいか」1915年東アメリカ学生会論文。姜義華編『胡適學術文集・言語文字研究』中華書局、1993年、pp.1-2。
39 同上。
40 同上。
41 胡適「作文するには文法を重んじないと害が生じる」同上書、pp.85-91。
42 盛兆熊、胡適「文学改革の進行手続きに関する検討」『新青年』第4巻第5号、1918年、pp.2。
43 同上、p.5。
44 同上。
45 同上。
46 王建軍『中国近代教科書発展研究』関東教育出版社、1996年、pp.238-239。
47 胡適「国語講習所同学録・序」『新青年』第3巻第3号、1921年、p.3。
48 周作人「児童の文学」『新青年』第8巻第4号、1920年、pp.1-5。
49 「最近は次のような動向がある。児童文学、すなわち、童謡、寓話、おとぎ話などの登場である。……北京大学の周作人先生も児童文学を研究しており、商務印書館、中華書局も児童文学シリーズの本を出版している。……概して、文学を発達させるのは、児童の文学的趣味を育成することと大きく関係している」胡適著・姜義華編、前掲書、pp.312-313。
50 胡適「中学校国語の教授」『新青年』第8巻1号、1920年、pp.1-12。胡適「中学校の国語教学についての再検討」『晨报副鐫』(新聞の朝刊)1922年8月27日。
51 胡適「中学校国語の教授」『新青年』第8巻1号、1920年、p.1-2。
52 同上、p.2。
53 Hu, Suh. The Development of the Logic Method in Ancient China. (Order No. 0128352, Columbia University) .ProQuest Dissertations and Theses, 1927, pp.1-6.
54 同上。
55 胡適前掲論文(「中学校国語の教授」)、p.9。
56 同上、pp.2-5。
57 同上。
58 同上、p.3。
59 胡適前掲論文(「中学校の国語教学についての再検討」)、p.1。
60 2002年に梁啓超の手稿が8頁ほど新しく発見された。それは「中学校の国語教材は小説を採用すべきではない(中学国文教材不宜採用小説)」というタイトルで『中華読書報』(2002年8月7日)に掲載されている。2003年に陳平原編『現代中国』第3輯に収録されている。
61 胡適前掲論文(「中学校国語の教授」)、pp.3-6。
62 梁啓超前掲新聞(「中学校の国語教材は小説を採用すべきではない」)。
63 梁啓超「中学校とそれ以上における作文教授法」中華書局、1925年、p.46。
64 同上、p.52。
65 同上、pp.53-54。

(教育方法学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2013年9月2日、改稿2013年11月28日、受理2014年1月21日)

A Study of Hu Shih's Theory of Language Education: Focusing on the Modern Vernacular Chinese Movement

ZHENG Guxin

The purpose of this paper is to explore the language education theory of Hu Shih(1891-1962), focusing on the modern vernacular Chinese movement. Hu Shih's theory of vernacular Chinese and literary innovation have played a critical role in the development of language education in China since 1917. This paper examines "freedom of thought and liberation of spirit", a literary reform that Hu Shih organized. He was standing in the position of being opposed to "formalism". By asserting "literature of language, language of literature," Hu Shih tried to connect living literature in vernacular Chinese to the formation process of living language. Furthermore, Hu Shih has contributed not only to the theory of literature and language education but also to the policy and practice of language education reform. Accordingly, "Freedom of thought and liberation of spirit" in the modern vernacular Chinese movement for which Hu has aimed is embodied in the purpose and teaching methods of language education in secondary education. Hu Shih questioned the lack of logic in classical Chinese literature, and aimed to improve students' logical thinking and imagination in literature.